

横山ゆずり作 「試練」

<前編>

(効果音) (工事現場。圧搾機、ダンプカー音など。)

作業員1 おーい、その鉄筋、こっちによこしてくれ。

作業員2 よし、行くぞ。気をつけろよ。せーの、よいしょ。

作業員1 原田さん、この鉄筋はどうしましょうか?

原田光一 ああ、それは今日中に組んでおいた方がいいな。

作業員2 何だか天気が怪しいですね。

原田 そうだな。降ってくると仕事がやりにくくなるからな。雨が降り出す前に仕上げてしまおう。頼むよ。

作業員1、2 (口々に)はい。

原田ナレーション わたしは原田光一と申します。建築資材の会社に勤めて十数年。高層ビルを始めとする建築の現場で、作業の指揮を執るのがわたしの仕事でした。

作業員1 おーい、降ってきたぞー。

作業員2 こりゃ結構ひどい雨だな。今日はもう無理だろ。

作業員1 早いとこ上がりたいなあ。

ナレーション その日は午後から空模様が怪しくなり、就業間際に大粒の雨が降り出しました。まだ鉄筋が組まれただけの現場は、雨ざらしになると滑って作業がしにくく、また危険なのです。その日も、安全を期して早めに作業を切り上げようとした矢先のことでした。

(効果音) (サイレンの鳴り響く音)

ナレーション 突然、緊急事態を知らせるサイレンが構内いっぱい鳴り響いたのです。

現場の声 (遠くで口々に)おーい、どうしたあ? / 事故か? / だれだ? / 大変だぞ

作業員1 原田さん、大変です!

原田 どうした、事故か?

作業員2 はい、第5班の松下さんが、足場踏み外して…。

原田 何、松下が?!

ナレーション そのサイレンは、現場の落下事故を知らせるものだったのです。

原田 松下、大丈夫か?

松下 (うめくように)あ、原田さん、すみません。おれ…。

原田 いいから、しゃべるな。すぐ病院に連れて行ってやるからな。しっかりしろよ。

(効果音) (救急車の音)

ナレーション 不幸中の幸いで、松下君のケガは命にかかわるものではなく、全治3か月との診断を受けました。

(効果音) (玄関のドアを開ける音)

妻 お帰りなさい。今日は大変でしたね。

原田 ああ。心配だったんで、病院まで付き添って、一応医者の話も聞いてきた。複雑骨折もあるんで、3か月はかかるそうだよ。

妻 まあ、松下さんも気の毒に。あなたも、くれぐれも気をつけてくださいよ。

原田 ああ、もちろんだよ。日ごろから部下たちには安全確認を口やかましく言っているからな。そのおれが事故ったら、示しがつかないよ。

ナレーション そして、その事故から数日たったある日のこと、わたしは突然、本社の部長から呼び出しを受けたのでした。

部長 やあ、原田君。わざわざ呼び出してすまなかったな。まあ、掛けてくれ。

原田 はあ。あの、何のお話でしょうか。

部長 いや、実はね。ほら、この間、君のところの現場で事故があったろう。あれが早速、元請けの「高嶺建設」の耳に入ってね。嚴重注意を受けちゃったんだよ。いや、君も知ってのとおり、うちは下請けだろ。何と言っても、大手の親会社の言うなりになるしかない、弱い立場なんだよ。

原田 はあ、それは分かります。

部長 おまけに、3か月前にも1度、事故があっただろう。それで今度と2回続いたもんだから、「安全管理に問題があるから業者を変える」とまで言ってきたんだ。それだけは何とか頭を下げて勘弁してもらったんだが、一つ条件を出されてしまってね。実は、この度の事故の事後処理として、その責任を形で示せって言うんだ。つまり、直接担当者の進退っていうか…。

原田 責任者のクビを切れってことですか。

部長 まあ、早い話がそういうわけなんだ。いやあ、元請けの方も、何かの調査が入ったときに、「これこれの処分をしました」と言えないと、まずいらしいんだ。それで、誠に言いにくいんだが、原田君…、この度は、君に目をつぶってもらえないだろうか。

原田 ちょ、ちょっと待ってください。部長、わたしがクビということですか？

部長 原田君、すまん。申し訳ないと思っているよ。

原田 そんな、どうしてですか。先回も今回も、事故はうちの班じゃありませんよ。それなのに、どうしてわたしが責任を問われるんですか？

部長 いや、君の気持ちはよく分かるよ。だがね、班が違うとはいえ、君は現場監督者として、主任という立場にあることを忘れてもらっちゃ困る。

原田 もちろんですよ。だからこそ毎日毎日、徹底的に安全確認を行ってきたんです。それこそ現場の人間にうるさがられるくらいに。それなのに、直属の担当者を差し置いて、わたしに責任を取れと言われても納得がいきません。

ナレーション わたしにとっては、まさに青天のへきれきとしか言いようのない処遇でした。

部長の話から推測すると、例の事故の直接の担当であるわたしの同僚は、専務の縁故関係であるため、解雇するわけにいかず、わたしにお鉢が回ってきたようでした。

原田モノローグ 畜生！ どうしておれが辞めなくちゃならないんだ！ なぜおれが…。入社以来、会社のために働いて働いて、自分なりに誇りの持てる仕事をしてきたつもりだ。会社だってそれは認めてくれていると思っていたのに…。今までの十何年ものおれの仕事は、一体なんだったんだ！

ナレーション その夜、わたしは久しぶりに独りでヤケ酒に浸りました。しかし、いくら飲んでも、酔うどころか頭はますますさえ、怒りと悔しさがこみ上げてくるのです。会社に捨てられた。そんな惨めさの中で、かろうじてわたしを支えていたのは、「こんなことで負けるおれではない。いつか今まで以上に大きな仕事をして、会社を見返してやる」というプライドでした。

それから何日か、家族にも何も言えないままに過ぎました。しかし社宅住まいの身としては、当全引っ越しをせねばならず、いつまでも妻に隠してはおけません。

妻 何ですって？ どうしてあなたが…。どうしてなのよ。

原田 だから、今も言ったとおりだよ。会社存続のためには、だれかがミスを取らされる。

妻 そんなの、おかしいじゃないですか。あなたは直接関係ないんでしょ？

原田 とにかく、何とかする。心配するな。

妻 良太の学校だってあるし…。とりあえずわたしは、良太を連れて実家へ帰りますから。あなたのお仕事が見つからなきゃ、どうにもならないですからね。

ナレーション こうして、家族の別居生活が始まりました。幸いにも、わたしの再就職先については、元の会社の紹介に加えて、知り合いからも幾つかの声がかかり、すんなり内定をもらうことができました。それにつけても、新居探しを含めて気になるのは経済的な負担のことです。そこでわたしは山崎という友人を訪ねてみることにしました。彼とは学生時代からの親友でしたが、2年ほど前、彼が、勤めていた会社を辞めて店を持つことになった時、いくらかを用立ててやったのです。また、そのときの借金の保証人にもなっていたのです。お互いに忙しく、このところ連絡も取り合っていなかったのですが、この機会に顔でも見て、ついでに以前用立てたもののうち、一部でも返してもらえればと思い、軽い気持ちで出かけたのです。

(効果音) (道路の雑踏)

原田モノローグ ええと、3丁目、22の6。ここが22の4だから、この先かな。お、ここだ。「喫茶ジュノン」。あれ、おかしいな。閉まってるぞ。定休日か？ 確か住まいはこの2階だったはずだが。

(効果音) (ドアのチャイム)
原田モノローグ 店が休みだから、家族でどこか出かけたのかな。
(効果音) (ドアのチャイム、続けて何度か)
近所の人 あの、お宅さん、ここのお知り合い？
原田 はい、友人ですが。今日は留守ですかねえ。
近所の人A そのこの家の人たち、ここんと見かけないわよ。
近所の人B 大きい声じゃ言えないけどね。半年ぐらい前から、借金取りみたいな、何だか怖そうなのが、よく来てたみたいよね。
近所の人C そうそう、1月ほど前から、店も占めたまんま、一家で夜逃げじゃないかって、近所では言ってるんですよ。
原田 そんな…。山崎が…。まさか、夜逃げだなんて。
ナレーション わたしが、半ばぼう然としてその店の前に立ち尽くしている時でした。
サラ金の男 山崎さん、山崎さん、お留守ですか？ ちえ、本当に留守かよ。
(効果音) (ドンドン戸をたたいている。)
原田 あの、留守みたいですよ。
サラ金の男 あ、どうも。お宅も金融関係？
原田 いや、わたしは友人ですが。
サラ金の男 ああ、ご友人ですか。これはどうも失礼しました。私、高砂ローンの宮本と申します。
原田 あ、あの、原田です。
サラ金の男 原田さん…。原田、ええと、もしかして、原田光一さんですか？
原田 どうしてわたしの名前を？
サラ金の男 いやあ、奇遇だなあ。こんなところでお目にかかれるなんて。
ナレーション 今にして思えば、この男との出会いが、わたしの新たなる試練の始まりだったのですが、そのときは知る由もありませんでした。

<後編>

原田 あの、どこかでお会いしたことがありましたっけ？
サラ金の男 いや、これは失礼しました。実は、原田さん、あなた、この家の山崎さんのご友人でしたよねえ。
原田 ええ、そう申しましたが。
サラ金の男 それで、山崎さんの保証人になってらしたんですよ。いやあ、助かったな。何しろね、ここのお宅、1か月ほど前からお留守でね。うちとしても、もう困っちゃってたんですよ。いや実は数日前に、あなたの職場にご連絡したんですよ。そうしたら、退職なさったというじゃありませんか。これはつきり、保証人にも逃げられたかと思いましたがね、どうやら思い過ごしだったようですね。

まあ、うちとしては、今までの滞納分の利子も含めて、一括でとお願いしたいところですが、急な話で原田さんにもご事情がおりでしょうから、分割ということも…。

- 原田 ま、待ってください。わたしが払うんですか?!
- サラ金の男 はい。だって、お宅、保証人でしょう？ とにかくうちとしては、だれでも払ってくればいいわけです。まあ、ざっと見積もって600万ですかね。
- 原田 600万…。
- ナレーション わたしはぼう然として、返す言葉もありませんでした。驚いたことに、借りた時の500万は、もう600万になっていました。保証人になったのは、独立して自分の店を持ちたいという親友の夢と、経営を軌道に乗せるための彼の綿密な計画を信じてのことでした。もちろん、万が一の場合は自分の身に降りかかってくることも覚悟の上でしたが、当時のわたしにとっては、多少無理をすれば何とかなる額でした。しかしそれは、人生の再建の時である今のわたしには、あまりにも大きな負担でした。
- サラ金の男 とにかく、ハンコついた以上、責任は果たしていただくということで、原田さん、一つよろしく願いますよ。何かのときには、新しい会社の方に連絡させてもらいますからね。
- ナレーション 丁寧な言葉遣いとは裏腹の、有無を言わさぬその男の口調に、わたしはただ黙り込むばかりでした。そして、この保証人問題が、わたしの人生をさらに谷底へと突き落とすきっかけになったのです。
- (効果音) (電話呼び出し音)
- 原田 はい、原田ですが。ああ、大丸建設の、はい、この度はお世話になります…。
(FO)
- ナレーション それは、再就職先の会社の人事部からの電話でした。
- 原田 得、何ですって？ 採用取り消し？ そんな… 何かの間違いじゃ？ 先日の面接では、来月の1日から入社するように言われているんですが。内定通知も頂いてますし。
- ナレーション 思いがけない知らせに、わたしは慌てて会社に駆けつけました。そして人事担当の口から出たのは、例のサラ金業者の名前でした。恐らく、わたしの新しい勤務先の確認のため、会社に問い合わせでもしたのでしょうか。会社としては、入社前から、サラ金から電話の入るような人間は危ないと怪しむのは、当全でしょう。それを言われては、わたしも引き下がるしかありませんでした。こうしてわたしの職探しはゼロからのやり直しになりました。いいえ、マイナスと言ったほうがよいかもかもしれません。今やわたしは600万の借金を抱え、サラ金からマークされる男になってしまったのですから。しかも、以前紹介を受けたほかの就職先は、もうすべて断ってしまったので、今度は自分で一つ一

つ当たるしかありません。手探りのような職探しが始まりました。職業安定所、就職情報誌、昔の知り合い、もうプライドも見えも捨て、あらゆるつてを頼っての職探しでした。そんな中で、わたしは学生時代の先輩の会社を訪ねたのです。

(効果音)

(喫茶店のBGM)

原田

すみません、藤森さん。お忙しいのに、お時間取っていただいて。

藤森

いや、大丈夫だよ。原田君、君の方こそ、大変だったんだねえ。電話もらってびっくりしたよ。相変わらず仕事の鬼で、バリバリ働いてるとばかり思っていたからね。

原田

いや、全く、先輩にはお恥ずかしい限りです。

藤森

いや、恥ずかしくなんかないさ。人生、時には自分の力ではどうしようもないことに出会うもんだよ。そういうときには、自分を責めたりしちゃいかな。じっと時を待つことも大切かもしれんよ。

原田

そう言っただけだと、何だか慰められますよ。ここ1か月ぐらい、何が何だか分からないうちに、なだれと津波が一遍にやってきたようで、自分の身の上が自分でもよくつかめないというか…。

ナレーション

思えば、この藤森さんという人は、学生時代から不思議な雰囲気を持つ人でした。取り立てて教訓を垂れるわけでもないのに、なぜか相談事を持ちかけたくなるような。この時もわたしは、ただうなずきながら聞いてくれる藤森さんを前に、妻にも決して言うことができなかつた泣き言を打ち明けていたのです。

藤森

…そうか。本当に災難だったなあ、原田君。しかし、君ほどの人だ、必ず立ち直って、このことをよい経験としていけるよ。試練というのは、その人の耐えられる分しか与えられないというからな。わたしも、仕事については、知り合いを当たって、できる限りのことはさせてもらおうよ。何かあったら、また遠慮せずに相談に来てくれよ。会社だと慌ただしいからな。日曜なら、いつもここにいるから、よかったら顔を出してくれ。

ナレーション

そう言って藤森さんは、1枚のパンフレットをわたしに差し出したのです。

藤森

わたしが言っている教会のパンフレットなんだ。気が向いたら読んでみてくれよ。裏に地図と電話も書いてある。

原田

先輩、まだ教会に行ったらしたんですか。

藤森

ああ、もちろんだよ。教会は学校や会社と違って、卒業も定年もないからね。

ナレーション

改めてそのパンフレットに目をやると、表紙に大きな文字でこう書かれてありました。

原田

「あなたを休ませてあげよう」ですか…。

藤森

ああ。聖書の中の、イエス・キリストの言葉だ。今の君に必要なのは、金や仕

事よりも、本当の安らぎじゃないかな。

ナレーション 藤森さんの言うとおりでした。今まで仕事に打ち込み、会社一筋に尽くしてきた結果が、会社に捨てられ、住むところも追われ、家族もバラバラ。そして相次ぐ友人の負債の肩代わりと、新しい仕事の取り消し。自分の人生はなんだったんだと問うてみても、何も答えは出ない。まさに心身ともに疲れ切っていたわたしでした。本当に心から休めるところがあるのなら、そこへ行きたい。しかしまた一方では、「わたしが休ませてあげよう」などと他人に言える者がこの世にいるのか、という反発もあったのです。この度の災難で、親兄弟は、同情しつつも、わたしの愚かさ、思慮の足りなさを責めました。わたしを支えてくれるはずの妻にさえなじられ、我が身の不運を嘆くばかりでした。

(効果音) (賛美歌)

ナレーション しかし、そのようなわたしの思いを超えて、神はわたしをそばに引き寄せてくださいました。結局、藤森さんの口利きで新しい職を得ることができたわたしは、お礼かたがた、以前話に聞いていた教会を訪ねてみました。もちろん先輩へのお礼という目的はあったのですが、やはり心のどこかに、“休ませてもらえる場所”を求める気持ちがあったのだと思います。

教会の受付 原田 おはようございます。初めての方ですか？

教会の受付 原田 はい。あの、いいんでしょうか？

ナレーション はい、よくいらっしゃいました。

教会の受付 原田 初めて足を踏み入れた教会の礼拝堂には、静かですがすがしい空気が漂っていました。そこに集う人々の顔には、心からの安らぎが満ちているようで、このところ険しい顔つきをしている自分が恥ずかしく、わたしは思わず顔を伏せていました。しかし牧師の語るメッセージは、静かな中にも、人の心の奥まで鋭く見透かすようなものでした。その中で牧師は、「イエス・キリストは、あなたの罪のために苦しみを受けられた」と何度も語りました。

原田モノローグ 牧師 わたしのために？ なぜだ？ なぜ見ず知らずの人間のために…？

原田モノローグ 牧師 イエス様は、あなたを愛しておられます。ですから、あなたを救うために、十字架の苦しみを受けられたのです。あなたのために苦しまれた方だからこそ、真の安らぎを与えることができるのです。

原田モノローグ 原田 わたしを愛された…。 真の安らぎを…。

ナレーション 何も難しいことは分かりませんでした。けれども、「わたしも休ませてもらいたい」というかすかな思いが、心の奥底から、少しずつ広がっていくのを、その時、わたしは感じていたのです。

(完)